

第7期宇治市生涯学習審議会 会議録

名称	第7期宇治市生涯学習審議会 第9回審議会						
日時	平成28年10月14日(金)午後2時~4時						
場所	生涯学習センター 1階 第2ホール						
出席者	委員	×	岩井 浩	○	小宮山 恭子	○	西山 正一
		○	内田 徹	○	佐藤 るり子	○	林 みその
			奥西 隆三	○	清水 桂子	○	向山 ひろ子
		○	木村 孝		杉本 厚夫	○	森川 知史
			切明 友子		長積 仁	○	六嶋由美子
	事務局	○	藤原 千鶴(教育部参事(兼)生涯学習課長(兼)生涯学習センター所長)				
			瀬野 克幸(教育支援センター長)				
			富治林 順哉(教育支援課長)				
		○	今庄 真樹(生涯学習課副課長)				
		○	前田 暢(生涯学習課主幹兼生涯スポーツ係長)				
		○	高橋 紀子(生涯学習課事業係長(兼)生涯学習センター主査)				
		○	野口 里佳(生涯学習課生涯学習係長)				
		×	粕谷 祐次(生涯学習課生涯学習係主任)				
		○	太田 悠(生涯学習課生涯学習係主任)				
傍聴者	なし						

会議要旨は、下記のとおりである。

• 第8回審議会の会議録について

前回の会議録について、一部修正の上、公開とする。

1. 報告事項

➤ 平成28年度やましろ未来っ子みんなでHUGフォーラムについて

(事務局)

平成28年8月28日(日)久御山町中央公民館にて開催された。当日は、「社会総がかりで子どもの自己肯定感をはぐくむ」という演題で、森川委員長が講演をされた。委員6名の参加があった。

(委員)

森川委員長の講演はとても分かりやすかった。家に帰って、家族にも話した。シンポジウムでは、地域の方々が学校に入って活動をされている話を聞き、参考になった。また、中学生が自分の想いを語っていることに感動した。様々な話を聞き、頭で考えるだけではなく、自分で何ができるのかを改めて考える良い機会になった。

(委員)

学校関係の参加者が多かったように思った。森川委員長の講演で、「自己肯定感」という言葉は一般社会でよく使われているが、「自己受容」という言葉に置き換えた方が分かりやすいのではないかと話されていたのが印象に残っている。今の社会はできることに視点を当てがちだが、そこに行きつくまでの子ども達の姿を見守りたい。また、子どもたちの成長に政治は大きな影響を与えると感じた。シンポジウムでは各学校からの発表があり、中学生がスマートフォン問題について発表していて、参考になった。他地域のネットワーク作りのお話では、自分が住んでいる地域に比べて、進んでいると感じた。

(委員)

前半の講演で、京都府のアンケート調査では高校生の1%が違法薬物を勧められた経験があり、他の調査では中学生の70%がスマートフォン・携帯電話を持ち、そのうち90%がインターネットに接続しているという話を聞いた。また後半の森川委員長の講演では、個人化がどんどん進んでいると聞いて驚いた。シンポジウムでは、人と関わる仕組みづくりについてのお話があり、無理せずに、自分の強みを生かして、自分のために活動することで楽しく協力ができ、社会みんなで支え合う仕組みづくりができたらいいというものだった。森川委員長の自己肯定感のお話では、成功を積むことが必ずしも必要ではないと聞いて、今までの考えが覆され、息苦しさが抜けて、気持ちが軽くなった。

(委員長)

シンポジウムは、中学生の素晴らしい発言が続き、非常に盛り上がった。

➤ 平成28年度近畿地区社会教育研究大会(滋賀大会)について

(事務局)

平成28年9月9日(金)大津市民会館ほかで開催された。全体会では、「水郷を活かした農の里づくり」という演題で権座・水郷を守り育てる会事務局長、大西實氏より講演があった。午後は分科会に分かれ、第1分科会「社会教育委員の役割」に4名、第3分科会「地域づくり」に2名、第5分科会「青少年教育」に1名、合計7名の委員の参加があった。

(委員)

全体会では権座という酒作りの話を聞いた。小さな村で作ったお酒を全国に発信されているとのことだった。第3分科会では、兵庫県市川町の伝承文化を繋ぐ地域づくりの発表を聞いた。学びの場を作るが、それは参加する人の夢と希望とロマンがないといけないという話だった。特に、子どもたちに伝承する場合は、町内の人だけでなく、町外の人も入れて一緒にすることが大事であると力説されていた。

(委員)

第5分科会では青少年教育をテーマに、和歌山県みなべ町の取組を聞いた。四季を通じて、田植えや稲刈り、鮎のつかみ取りなど、様々な体験授業を子どもたちに行っている。

その中で心掛けていることは、子どもたちを参加させるだけでなく、参画させるということで、参加ではお客さん扱いで一時的な楽しみで終わるが、参画させると記憶に残り、次世代につなげることができるからとのことだった。子どもたちは大学進学を機に町を出ていくことが多く、こんなに手厚くする必要はあるのかという意見があるそうだが、出ていくからこそ、故郷を愛する気持ちを幼い頃から育て、大人になった時にその思いを地域に還元してもらおうという考えで取り組まれている。私も故郷を離れているので共感して聞いた。

(委員)

第 1 分科会では京丹波町の発表を聞いた。見守り隊のお話や、地域に根差した野菜のお神輿のお話もあったが、宇治市では民生委員がしているような取り組みであった。人口規模や立地条件から、宇治市とは少し違うように感じた。

➤ **宇治市生涯学習人材バンクの利用状況について**

(事務局)

平成 27 年度の利用実績を、登録講師向けのアンケート結果と依頼者から提出された利用報告書をもとに集計した結果、利用率は 32.1%となっている。人材バンク登録講師は 85 件。創設当初は、登録者数を増やすことに重点を置いていたが、登録期限を設けた結果、登録者数は減ったが、利用率は 3 割を超えている。

➤ **第 34 回市民スポーツまつりについて**

(事務局)

平成 28 年 10 月 10 日山城総合運動公園にて、市民スポーツまつりが開催された。体育、レクリエーション団体をはじめ、食育や健康づくり団体など多くの関係団体や関係者の協力のもとで実施した。当審議会委員からも、各方面から参加いただき、ご協力いただいた。当日は秋晴れの下、参加者に様々なコーナーを楽しんでもらった。

➤ **第 26 回紫式部文学賞受賞作品について**

(事務局)

受賞作品は「戯れ言の自由」平田俊子氏の作品に決まった。

➤ **第 26 回紫式部市民文化賞受賞作品について**

(事務局)

受賞作品は「つれづれの記」小野利子氏の作品に決まった。また、宇治民話の会の「この子らのために 2 宇治山城で聞いた戦争の話」が選考委員特別賞に選ばれた。文学賞、市民文化賞とも、11 月 20 日(日)に文化センターで受賞イベントが開催される。

➤ **今期のテーマについて**

発表 1

(発表委員)

成熟社会の社会教育について考えたい。これからの宇治市の社会教育の方向性について提案させていただきたい。先進国は人口減少が始まり、成長の時代から成熟の時代に入った。「モノ」(物質)の豊かさから「コト」(活動)の豊かさへ移りゆく時代の中で、成熟社会の生涯学習の在り方について考える。ここに、同じ量の水が入ったペットボトルが 2 本ある。一方は 80 円で一方は 100 円。皆さんはどちらを買いますか。

80 円のペットボトルを選ぶという声上がる

では、80 円の方は大企業が大量生産で製造したもの、100 円の方は震災復興でやっと製造できた商品で、どうしても 100 円かかる。どちらを買いますか。

100 円のペットボトルを選ぶという声上がる

これは何が違うのか。なぜ 100 円の方を選んだのでしょうか。

支援のためという声上がる

安ければ買うというのは、交換経済の考え方。震災復興に 20 円分の価値を贈与するという考え方が贈与経済の考え方である。我々は交換経済から贈与経済に移った。それが豊かな社会の選択である。現に、東日本大震災の際には、短期間に約 3,000 億円の寄付が集まった。熊本の震災の際も、1 週間で 2 億 7000 万円集まった。贈与が人間関係を豊かにするが、交換経済は心をギスギスさせる。贈与には、経済的贈与の他にも文化的贈与があり、おせっかい、世話焼き、お土産、おすそ分けなどの文化の豊かさをもう一度見直す必要がある。文化的贈与の中には活動としての贈与もあり、それがボランティアである。災害ボランティア、福祉ボランティア、最近ではスポーツボランティアが出てきた。

スポーツボランティアは長野オリンピック(初めて民泊が行われた)で注目され、日韓サッカーW 杯で市民権を得るようになった。最近では市民マラソンでのスポーツボランティアが盛んで、大阪マラソンでは選手 3 万人に対し、1 万人のボランティアが集まり、「来年も是非参加させてほしい」という感想がある。「してあげている」でなく「させてもらっている」という気持ちで参加していて、本来のボランティアの在り方だと思う。熊本地震では、瓦礫の撤去に来たボランティアに、作業が既に終わっていたので、畑の手伝いをお願いしたところ、「瓦礫の撤去に来たので、畑のことはしない」と帰ってしまった。これは本当のボランティアではない。なぜスポーツボランティアは「させてもらっている」気持ちになるのか。災害や福祉のボランティアは、まず苦しさの共有をしなければいけないが、スポーツボランティアは楽しさの共有をすることができる。また、「感謝」されるよりも、選手から「感動」をもらうことができる。そこに本来の贈与の在り方が表れている。

応援もまた贈与である。「頑張れ」だけではなく、優しい心遣いや励ましの応援が多く、大阪マラソンでは、ユーモアな応援の言葉が多く、非常に面白い。大阪マラソンでは、ランナーは出場するために、7 つのテーマから最低 2 口(1,000 円)寄付するか、各団体への寄付金(7 万円以上)を集めるチャリティランナー制度がある。寄付金は 1 億 2,000 万円集まっている。しかし、寄付をしている人の中で、83.8%が寄付金を集めずに自分で 7 万円を支払い、出場権を得ている。これはチャリティランナーの趣旨とは一致していない。まだ交換経済であることを表している。私が目標としているロンドンマラソンでは、約 97 億円の寄付金が集まっている。海外では、例えば仮装をして、自分達のチャリティ団体の広告や情報の発信をするために走ることがあり、これも贈与・寄付の考え方である。

関西大学で、成熟社会の奨学金の役割というシンポジウムを行った。日本の奨学金はほとんどが貸与で、給付奨学金という制度がない。海外はほとんどが給付奨学金である。内田樹氏は、贈与経済論について話された。教育が交換経済の意識の中で、教育投資という考え方のもとに、商品として扱われ、教員に対して少しでも安く、サービスが良いかを求めるようになり、教育が成立しなくなっている。教育はあくまで贈与経済論の論理で、教員が先人から贈与された知識、考え方、生き方に至るまで惜しみなく学生に贈与し、学生はそれを社会に、次世代に贈与していくという在り方が成熟社会の教育である。

贈与経済が進んだ例として、吹田市立サッカースタジアムがある。約 140 億円の建設費を寄付によって集め、建てたものを市に寄付した。これをオリンピックでもしたら良い。これを仕掛けたのが桑原志郎氏である。寄付者のネームプレートスタジアムに設置することで、寄付者が家族を連れてやってくる。そうすることで多くの世代に広まり、ファンが増える。また、スポンサーに直接寄付をお願いすることで、熱意が伝わったともいう。広告代理店を挟むと、交換経済になってしまう。寄付を募ることは、社会教育を宣伝することにもなる。桑原氏は寄付を通じて地域やコミュニティを作っていきたいと考えている。

日本最大のクラウドファンディング会社を創設した米良はるか氏は、スキーのワックス費用捻出をきっかけに立ち上げた。自分が受け取ったものを、他人にどう引き継いでいくかという市民間の絆を育てる仕組みを作っていきたいという。寄付する人と寄付される人のコミュニティを作っていくため、「リターン」を大事にしている。「リターン」は等価交換ではない。普通の寄付とは違い、贈与したお金の使い道がはっきり見えることで、寄付する人と寄付される人をつなぎ、寄付する人同士のコミュニティもできる。クラウドファンディングは、多額な少人数より、少額でも多くの人に関わってもらえるメリットがある。

贈与コミュニティの構築というのは、生涯学習で自分が学んだことを社会に贈与することでできる。このような循環ができてくることによって、贈与経済における社会ができあがり、豊かな人間関係ができあがるのではないか。

(委員長)

贈与経済は浸透しにくい。クラウドファンディングは例えば、新しい物を作ってみたいという人に出資すると、その試作品がもらえたりする。こういうことが広がっていくことが大事で、そこからコミュニティができれば良いのだが、なかなか難しい。

(発表委員)

生涯学習で贈与経済を学ぶ必要がある。学んだことを自分だけのものにしていないのは交換経済だ。学んだことを人に贈与することで、生涯学習によるコミュニティ構築ができる。

(委員)

仏教の行為に托鉢僧への喜捨があるが、喜んで捨てる書く。お金をあげた上に拝むというもので、この精神は贈与経済に近いのではないか。

(委員長)

確かに似ているかもしれない。自分ができない修行をしている人を支援するというもの。

(発表委員)

イギリスでは「Thank you」と言われたら、「It's my pleasure」と返す習慣がある。「それは、私の喜び」という意味で、「やってあげた」ではなく、「Can I ~」「May I ~」なども「させてもらった」という感覚から来ている。そういう関係が築ければいいと思う。

(委員)

私も喜捨という言葉が合っていると感じた。贈与という言葉は一方向的に感じるところがあるが、喜捨の言葉には相手を想う気持ちが込められている。相手とのつながりや広がりが見えることで、贈与や喜捨が浸透していくと思う。

(委員)

年に2回、体育協会でチャリティゴルフコンペを行っている。参加者には一人500円頂いている。集まったお金はスポーツの振興に役立てるとだけ伝えているが、何百人という方が参加している。これが続いているのはどういうことだろうか。

(発表委員)

大事なものは、金額の多寡より、集めたお金を何に使ったのかを明確にすることである。明確にしないと、使ったところと、自分たちとの関係ができない。大阪マラソンでは、集まったお金の使い道をホームページ上に掲載している。何に使われているかが分かることで、つながりができる。今後はその点を丁寧にしていく必要があると思う。

(委員)

共同募金は、集まったお金を何に使ったかをリーフレットに載せているが、不完全か。共同募金より神社への出資の方を優先されることがある。

(発表委員)

最初に何に使うか提示した方がよい。クラウドファンディングは、こういうことがしたいからお金がほしいと提示している。そうすれば、その事柄と自分がつながることができる。贈与や寄付はその人やそのものとの関係を作ることができる。

発表 2

(発表委員)

地域とスポーツ振興のビジョン、スポーツコミッションの存在、スポーツ振興やまちづくりという車をどう走らせるか、この三点について話していきたい。

つながりの希薄化が社会にもたらすダメージの一例として、「独りぼっちなボウリング」という本がある。日本では、ジョギングやウォーキングを除いた大人のスポーツでは、2

番目に競技人口が多く、4人に1人が年に一度はするという。アメリカではボウリング人口は10%増加しているが、チームを組んで大会に出場するリーグボウラは40%減っている。独りでボウリングをする人の増加が、ボウリング場経営に大きな影響をもたらす。レーン効率が下がることと、飲食が少なくなることにより、収入が減るからである。

国が作った方針に基づいて、地方自治体がスポーツ振興計画を作り始めたが、それぞれの地域にあった計画が必要である。国が推進し、全国に3,300の総合型地域スポーツクラブができたが、これが現在危機に陥っている。問題と目的が不明瞭で、作ることが目的となってしまう。地方が何を成し遂げたいのかを定義づけることが大事。行政が成し遂げるべき成果はサービスの提供ではなく、人間変革である。サービスを受けた人が、与えてもらう側から、与える側になるような循環を作ることが地方自治体の役割である。

スポーツの可能性は大きいのではないかと。地域が抱えている問題の解決にスポーツを生かせないか。スポーツを通じた地域経済の活性化及び地域振興を有機的に図るための推進組織としてスポーツコミッションという組織がある。アメリカのインディアナポリス市は自動車産業で栄えたが、時代と共に自動車開発が市外に出てしまい、衰退し何もない街と揶揄された。その際、スポーツコミッションが国内・国際大会の誘致を全国に行い、アマチュアスポーツのメッカにしようと売り込んだ。日本でも、スポーツコミッション関連組織が全国的に広がっている。スポーツ振興だけでなく、スポーツが持っている力を地域の活性化に生かしたいと考えている。地域の多様な問題の解決には、地域イノベーションを誘発するネットワーク化が必要である。個々で活動するのではなく、事業効果や効率を向上させるために、様々な英知を結集させることで、資源の効率化ができるのではないかと。

これらを含むスポーツ振興という車を走らせるためにパーツは揃っているのか。どんな車で、どこを目的に走るのか。運転手は地域住民、道路は目的やビジョン、ガソリンは経営資源、車体は役割や機能、エンジンは組織や協働システム、タイヤは戦略と事業、カーナビは生涯学習審議会のような組織の役割である。自ら振興させていく(自助)、地域の誰とどう手がけていくか(共助)、国や地方自治体による環境作り(公助)を考え、地域社会が抱える問題を解決する方法にスポーツを加えることで、地域イノベーションの創出ができるのではないかと。今我々が議論していることをどのようにビジョンに変えて、それを誰がどのようにいつまでに遂行するのか、行政と協力して考えられたらいいのではないかと。

(委員長)

スポーツではなく、文化活動についても同じように考えていいか。スポーツは分かりやすい。文化的なものはなかなかスポーツのようには進められない。

(発表委員)

今回はスポーツをトピックにしたが、基本的には同じように考えられると思う。皆さんの生活の中で一番求心力があるものが良い。それがスポーツとは限らない。

(委員長)

今のお話を進めていくと、ひとりボウリングは減るのか。

(発表委員)

その話と連動はしていないが、人と人がつながる機会がなくなっていることが問題。人をつなげるものがスポーツとは限らないが、何か仕掛けをしていかないと何も生まれない。仕掛けを行政だけに任せるのは重荷になるので、市民や民間企業も一緒に取り組んでいくことが大事。先ほどの発表の中でもあったが、寄付しただけではつまらない。その先に関わる機会が広がっていき、何かが見えてくることにつながりになる。

(委員)

宇治市にも 20 年前にスポーツクラブを作る計画があった。しかし、体育協会等や、行政にもスポーツを推進する組織があったので、必要ないと反対の声が多かった。国から補助金が出ていた。スポーツクラブを作ったのは何も無い田舎だった。補助金が出たことで何もかも無料にしたスポーツクラブは、その後補助金が終わり、失敗した。同じようなことをしていても行政は無料で行う。10 年続いた宇治市の全国中学生ボウリング大会は盛り上がった。日中もボウリング場にお年寄りが来て、にぎやかになった。

(発表委員)

価値を正しく評価することが大事。無料でやってもらうことが当たり前という考え方はどんどん衰退していく。

(委員)

スポーツクラブに入るより、友人を集めて自分たちでする方が安い。

(発表委員)

個人でできる人を取り込む必要はない。クラブの必要性は、限られている資源を共有することにある。クラブは変革の機会であり、仕組みであって目的ではない。目的が分からないまま仕組みだけを作ると失敗する。どう地域に役立ったかを検証する必要がある。

(委員)

かつてはスポーツクラブが場所を押さえて、どこも取れないから仕方なくスポーツクラブに入るという状態だった。最近ではそうでもないようだが。

発表 3

(委員長)

コミュニティというのは帰属意識が強く、それが連帯していることだが、経済をもとにして人間関係を考えることが必要であると考え。お金は人間関係を引き裂いていくものだという事に気付かないといけない。お金がなかった時は物々交換だったが、これは人間関係があってこそ成り立つ。人間関係が何をするのに必要で、損なわれていると良い生活ができない。お金が出てきてからは、お金で何でも手に入るようになった。お金は払ったらそこで関係が終わる。教育がサービスと言われるのも、高度な資本主義に原因があ

る。家族や親しい間柄など、人間関係ができあがっているところにお金は介在しない。

ウルリヒ・ベックというドイツの社会学者が、「第二の近代」ということを言っている。もともと人々は地域のコミュニティの中で、自給自足で生きていたが、産業革命が起こり第一の近代が始まった。農村から出て、都会で働く人が増えたが、会社への帰属意識が強く、農村での関係がそのまま会社に移ったようなものだった。しかし、第二の近代が始まり、会社でも以前のような関係はなくなった。グローバル化が進み、「社員は家族だ」という考え方がなくなったからだ。終身雇用と非正規雇用が混在し、会社内でも必要以上に他人と関わろうとしない。世界中で「個人化」が進み、コミュニティの帰属意識がなくなった。まさに「独りぼっちなボウリング」が増えていくことになる。コミュニティの再生ではなく、別のコミュニティをどう作るのかを、社会教育は考えていかなければならない。

そのことについて3種類考えた。村社会のときは、生産のコミュニティと生活のコミュニティは一緒だった。現在は分かれており、生活のコミュニティがやせ細っている。農村型コミュニティから都市型コミュニティに移り変わり、個人化が進んだ。しかし、子どもと高齢者は地域に根ざさないと生きられないので、コミュニティを考え直す時期にきている。空間あるいは時間コミュニティがあり、NPOやボランティア団体など、人とつながることを求める人もいる。これは危機感を持った人たちの集まりだと思う。土地に根ざした組織ではない。インターネットなどを通じて出会い、コミュニティ意識を持って、活動している。今後は、こういった同じ志を持った人たちのコミュニティをどう育てるかが重要だと思う。最終的には、もう一度地域に根ざしたコミュニティを育てることが目標だが、最初のきっかけは、同じ志を持った人たちのコミュニティであると思う。

個人化が進む中で、当事者意識を持って自分たちがどう生きていくのか。自立・自律した市民をどう育てるのか。この点について私は、公民館を活用して、自立した市民を育てる講座を開催し、これを社会教育として、宇治市で動かしたいという夢を持っている。

(委員)

私の息子も会社で60周年の祝賀会を開くので家族を呼ぶようにとあったが、家族みな参加しなかった。結局会社から子どもにクーポンを配ることで参加があったようだ。公民館の話は、私も活用していきたいと考えている。

(委員)

退職して8年になる。訃報の連絡は時々来るが、飲みを誘われたことは2回しかない。

(委員長)

今後は、その訃報の連絡さえ来なくなるだろう。地域でも個人葬が広まり、亡くなったことさえ、人伝えにしか聞かない。個人化の流れがどんどん進んでいる。企業の中には、事故で輸血が必要になった時に、全国から旗を持って集まってきたというところもある。

(委員)

新しいコミュニティの創生というのはキーワードになると思う。インターネットでつな

がったコミュニティを表に出してくる手段は何かあるか。また、若い人向けに公民館を知ってもらうしかけが必要になると思う。

(委員長)

そこまでは、まだ考えが及んでいないが、最終的には地域に根ざしたコミュニティを作っていかなければいけないので、インターネットだけではいけないと思っている。

3. その他

➤ 第 58 回全国社会教育研究大会(千葉大会)について

(事務局)

平成 28 年 10 月 27 日(木)から 28 日(金)にかけて開催される。森川委員長と向山委員長職務代理が参加されることが決定した。

➤ 平成 28 年度京都府社会教育研究大会について

(事務局)

平成 28 年 11 月 22 日(火)長岡京市立中央公民館にて開催される。森川委員長がコーディネーターとしてパネルディスカッションに出られる。

➤ 平成 28 年度第 2 回子育てサポータースキルアップについて

(事務局)

平成 28 年 11 月 17 日(木)京都府田辺総合庁舎にて開催される。

➤ 第 35 回宇治市「中学生の主張」大会について

(事務局)

平成 28 年 11 月 12 日(土)宇治市文化センターにて開催される。市内 11 中学校から各校の代表生徒が発表するので、お時間があれば、ご出席いただきたい。

➤ 歴史資料館特別展について

(事務局)

平成 28 年 10 月 1 日(土)より 11 月 20 日(日)まで特別展「進め!!奈良鉄道」開催。

• 最後に

(委員長職務代理)

本日は 3 人の先生方の素晴らしい発表を聞かせていただくことができた。内容は少し難しいものもあったが、最後に委員長から公民館の話題にまとめていただいた。

< 次回の会議について >

平成 28 年 12 月 16 日(金)午後 3 時から 生涯学習センターにて